

「更級村」を名乗る根拠にもなった

佐良志奈神社 社標和歌 画像調整し"拓本"に

おうぎまちさんじょうさねなる
書は正親町三条実愛さん



佐良志奈神社の社標。右側面に象山の漢文、左側面に和歌。社標は高さ約240センチ、和歌は約170センチの長さで刻まれている。正面の「佐良志奈神社」も実愛さんの字



→ 翻刻

→

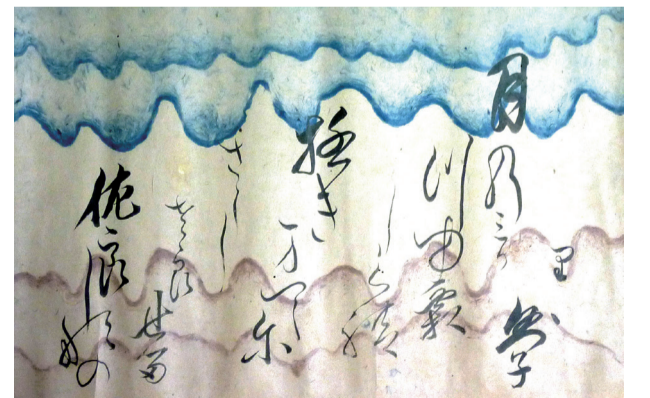
月乃み可つ由しもしぐれ雪未天に
さらし佐らせ流さらし那のさ登

月のみか露霜しぐれ雪までに
さらしさらせるさらしなの里

明治の市町村合併の際、「更級村」と名乗る有力材料となった佐良志奈神社社標の和歌。江戸幕末の京都の歌人柳原則子さんの作で、「月のみか露霜しぐれ雪までにさらしさらせるさらしなの里」というその詠みぶりから、都人が千年にわたって「さらしな」という地名を抱いてきた、さすががしさと躍動のイメージがよく分かります。社標に刻まれた和歌の書体は、柳原さんがしたためた墨字（写真右下）と違いますが、高さ約240センチの巨大石柱の左側面に、29の文字が2行に渡って、大きく流麗に書かれています。上から下まで約170センチあります。誰の字な

のか分かりました。江戸末期から明治にかけて朝廷と新政府で重要な働きをした正親町三条実愛さんです。社標右側面には、松代藩士佐久間象山の書で社標ができた経緯（由緒）が漢文で刻まれており、実愛さんが歌の字を書いたと読み解けるのです（左下の翻刻傍線）。実愛さんの詠んだ別の歌の短冊の書体にも、特徴の似ている字があり、特に「雪」のくずしがそっくりです。和歌の書の主を突き止めるのにお世話になったのが、象山の書の企画展を開催した長野県立歴史館学芸員の林誠さんです。象山の由緒の書体も、企画展のために林さんが採拓。図録にも掲

載（写真左中央）になった関係で、由緒の解説にもご協力いただきました。中央が、実愛さんの筆による社標和歌の書体です。実物は見上げるほど高く、光りの加減がよくないと見えづらいです。以前に撮っておいた写真の色味などを調整したところ、書体が拓本のように見えるようになりました。林さんは2行目の下句「さらしさらせるさらしなの里」で、「さ」の書体を書き分けているところに、かな書道への精通の深さを指摘します。実愛さんと佐良志奈神社の関係は本シリーズ3号と28号、柳原則子さんについては247号をご覧ください。



社標和歌を詠んだ柳原則子さんの書。染めが施された料紙に書かれている。下に翻刻

里
月乃み可 則子
川由霜
しぐれ
袖き万で尔
さらし
さ羅世留
佐良し那の

25 佐良志奈神社社標 碑側（拓本）
嘉永六年（一八五三） 原碑＝佐良志奈神社蔵



長野県立歴史館開館三〇周年記念令和六年度冬季企画展「佐久間象山遺墨展」書は人なり」の図録46ページから転載。佐久間象山の書が、高さ約240センチ、幅45センチの社標右側全面を使って刻まれている

佐良志奈神社社標 碑側

若宮邑 八幡宮神主松田直友携佐良志奈神社行表拓本来示予且謂曰直友所奉／祀神社載在延喜式神名帳其欽崇之久可知矣則社頭當富於古文書而中葉數罹兵／擾今亡復存者惟有鎌倉源將軍願書壹通脱於殘燹之中聊足為本社吐氣而已直友／嘗在京師深受正親町三條大納言實愛卿之知遇卿為書此石表亦社頭之榮也卿姑／柳原太夫人諱易子君亦嘗賜更級里歌壹首直友懼其久而或佚也復謁卿而書此并／刻之表側願先生記之直友舊俾其子重枝從予而學且執禮懇懇謹不可辭遂記之昭陽作詒夏四月既望 松代佐久間啓書

象山の書体を活字にしたもの。図録「佐久間象山遺墨展」書は人なり」106ページから転載